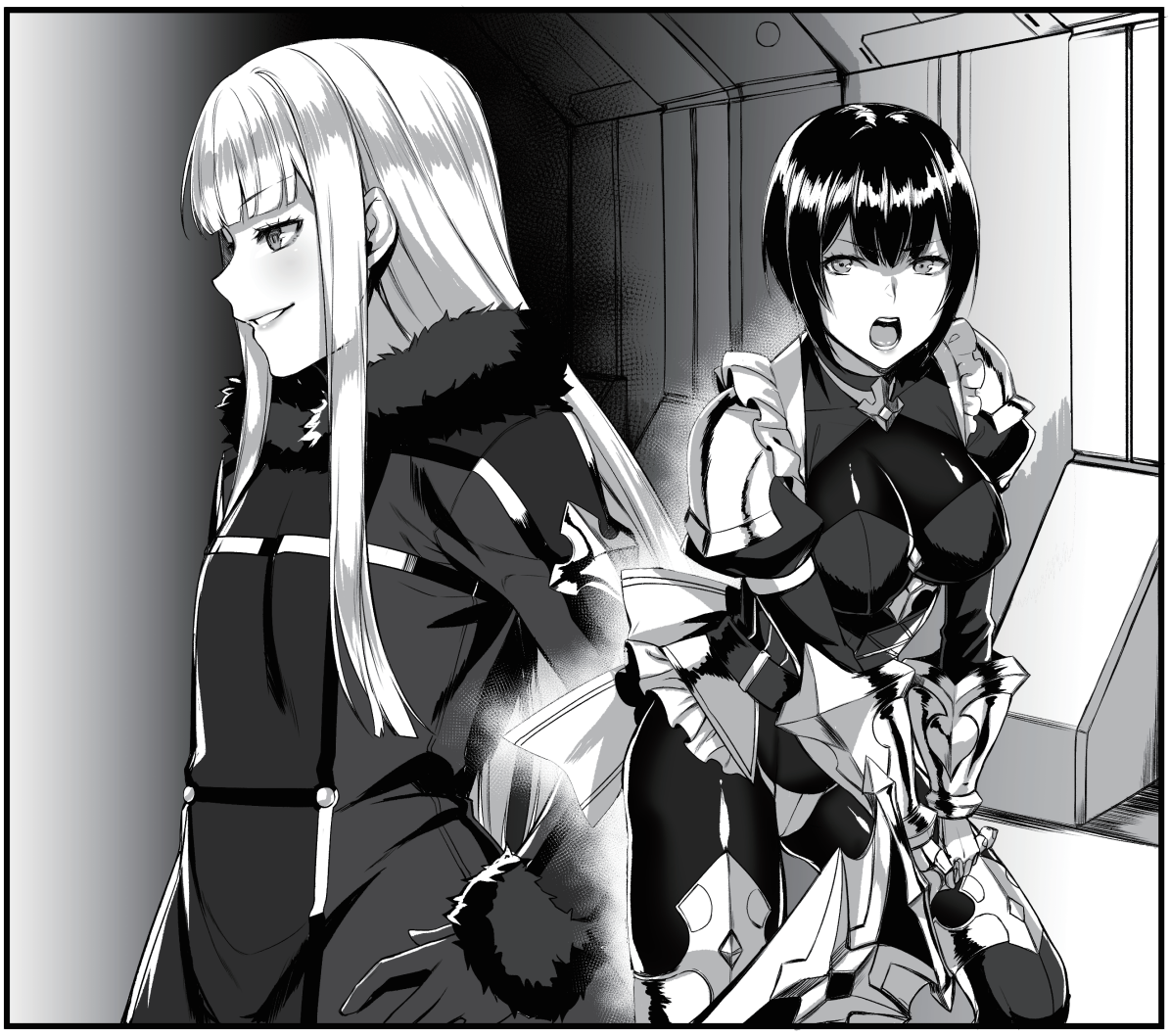


「せいやぁぁぁっっ!!」

裂帛のかけ声と共に大剣を横になぎ払う。その度に機械と腐肉が融合したような醜い触手が斬り飛ばされ、オイルとも血液ともつかない液体があたりに飛び散った。

「次はどいつですか！　遠慮せずにかかってきなさい！」

機械生命体を駆逐すると、大剣を改めてかまえ直しながらどこかで聞いているであろう研究所の主に向かってそうさけぶ。

（レイーネ様はもうサーバールームにたどり着いたでしょうか？）

油断なく周囲に気を配りながら、そんなことを考える。彼女の任務は時間を稼ぐこと。掃討が目的ではない。敵の注意をこちらに引きつければいい。

「このメイ・シローディアが恐いのですか!?　こんな小娘にいいようにやられて、悔しくはないのですか!!」

メイと名乗った女性は挑発を重ねた。

（これだけ奴らの気を引けばレイーネ様に目は向いていないはず……。あとはほどほどのところで引き、レイーネ様と合流しなければ）

頭の中で我が主人の姿を思い浮かべる。

傲慢で、サディスティック。しかし心根は優しく悪を許さない心を持った金髪の美少女。主人のことを考えるとメイの胸はややも昂ぶってしまう。

敬愛する主人は古くからある魔術師の家『ローゼンベルグ』家の現当主であり、全世界の魔術師を統べる組織『図書館』の幹部でもある。

この世界は科学と魔術の微妙なバランスの上に成立している。両者はあるときは不可侵であり、あるときは手を携えて社会の発展に尽力してきた。

科学も魔術も人の世をよくするためのに作り出された物だ。しかし技術を悪用しようとする者は必ず現れる。２つの力は強大であり、力に魅せられ飲み込まれた者達が許されざる外道な研究に手を染める。

そんな輩を粛正する立場にあるのがレイーネ・ローゼンベルグだ。

困難で、危険な職務に携わる女主人を公私にわたって支えてきたのが古くからローゼンベルグ家に仕えるシローディア家の現当主であり、筆頭メイドのメイ・シローディアである。

今メイが身につけているフェティッシュなボディースーツもレイーネがメイド服をモチーフにしてしつらえた特殊な戦闘服だ。

着る者の動きを全く阻害することのないメイド服は並の魔術師では傷一つつけられないし、生半可な物理兵器では虫に刺された程度にもダメージを与えられない。

メイド服をモチーフにしているのはレイーネが良き使用人であるメイへの敬意を示した物であり、彼女自身も誇りを持ってメイド戦闘服を身につけている。

黒髪のメイドもそれをわきまえているからこそ、これだけの強気に出ているのだ。

無論、彼女自身の凄まじいまでの能力もあってのこと。魔術界の最高峰にある家の筆頭使用人は生なかの腕では務まらない。心技体魔術、そのすべてが一流であり主人を守り、支える騎士としても一流なのだ。

（これが全戦力ということもないでしょうが……。大多数はこちらに向いているはず）

ひっきりなしに襲い来る警備ドローンの触手をメイの身長ほどもある大剣でなぎ払いながら考える。

魔術的にも科学的にも通信封鎖をしている今、主人の行動を知る術はない。だがレイーネの力ならばこの程度の相手、戦闘どころか見つかることもないと確信していた。

「せいっっっ！」

今ので破壊したドローンは二十数体。圧倒的な戦果を示しながらも、メイの呼吸は全く乱れていない。

今回の作戦はメイが警備の目を引いている間にレイーネがサーバールームに侵入、データを抜き出した後、データはもちろん施設そのものを破壊する。至ってシンプルだ。

主人は機械オンチというほどでもないが、得手というわけではないから少しは時間が掛かるかもしれない。だがそれくらいの時間を稼ぐ自信はあった。

だが、一抹の不安も無くはない。

（まだ魔科融合生物が出てきていない……）

レイーネ達の調べで今裏社会で脚光を浴びつつある新種の催淫効果の強い『魔薬』の出所がこの研究施設であることが判明していた。

これをキメてセックスをすれば並のクスリでは得られないほどのエクスタシーで脳天ぶっ飛び間違いなし！　という触れ込みだが、まだ研究途中の不完全な薬物のせいかクスリとしては著しく不出来で、量によっては一生イキっぱなし（感度300倍）の廃人になることも多く図書館や警察でも警戒を強めていた矢先の情報であった。

女性から生命力を効率的に引き出すための『魔術生物』が存在することもレイーネ主従の情報網にかかっている。

だが、いかんせん被害者は死亡、もしくは精神に異常を来しているためどういった存在なのかの情報は全くといっていいほどなかった。

（奥の手、ということでしょうか）

この身は主人に捧げた剣であり、盾でもある。魔科兵器がどんなに危険な存在でも、いや、それならばなおさらこちらに注意を向けさせねばならない。

（『奥の手』がレイーネ様に向かないよう、こちらに引きずり出すのがベスト……）

だとしたらまだ暴れたりないということか。

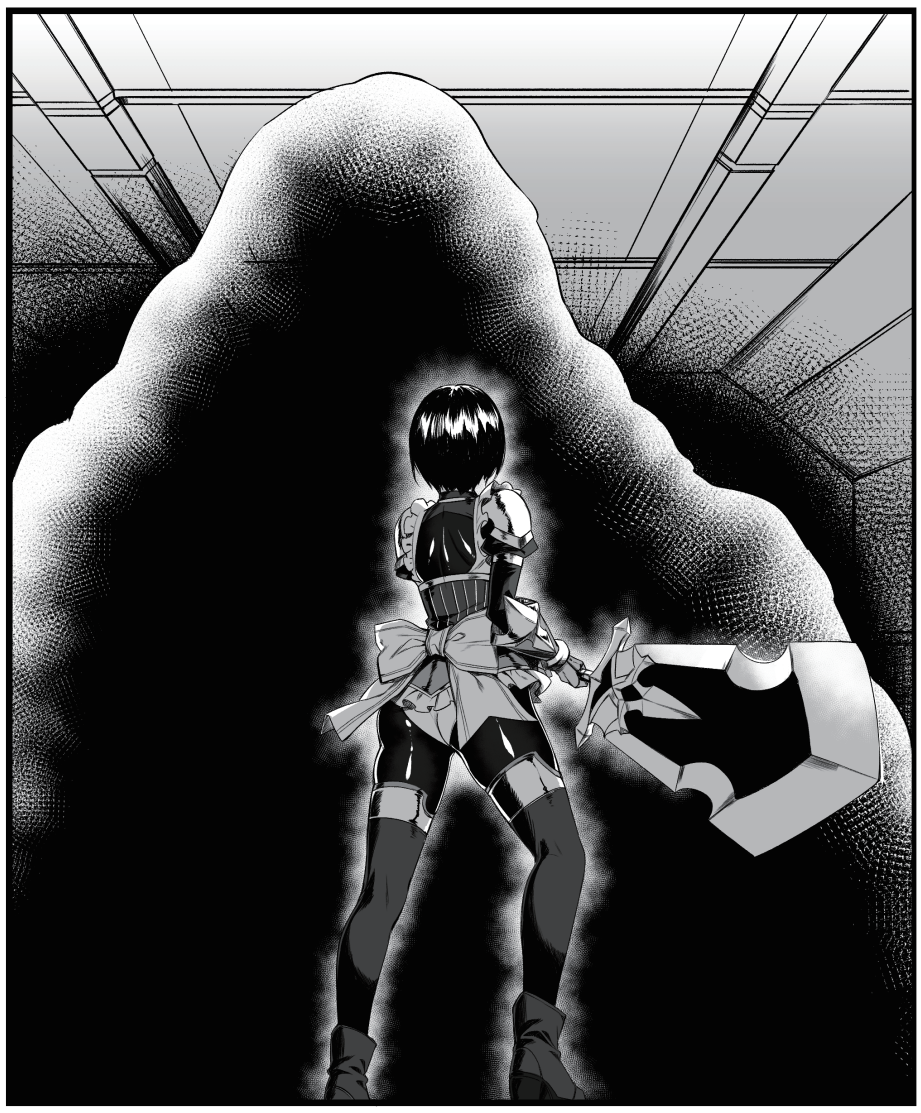
そう考えたメイはショートブーツに包まれた足で床に転がったドローンの残骸を蹴り飛ばし、手近な監視カメラにシュートした。

「命をもてあそぶ非道な研究、許してはおけません！　このままこの研究所ごとガレキにして差し上げます！」

そう高らかに叫ぶ戦闘メイド服の乙女。その様はヒロイックファンタジーの一場面のようだ。

メイの背後で、この研究施設に来てから今まで一度も聞いたことのない異質な音が鳴り響いた。

「何物!!」



硬い物の音ではない。機械音でもない。警備ドローンとは違う物の登場に身構えつつ振り返る。

「な……、なんですかこれは……!?」

メイは息を呑んで目を丸くした。視界に入ったのは異様な、得体の知れない『物体』。物体としか形容できないのだ。

何かの塊であるのは想像が付いた。しかし何で出来ているのか全く分からない。質感は金属のように見えるが、反して表面は水面のように揺らめいたり膨らんだりしており一定の形を保っていない。地面に散らばったドローンの残骸や瓦礫などを飲み込んでいるところを見ると液状であるらしい。

大きさも半端ではなかった。高さはメイの３倍以上、幅に関しては研究施設の壁から壁までを埋め尽くすほど。

そして色は時にすべての光を飲み込みそうな深い黒であったり、かと思えば透過したり。全体的には油のようなギラついた光沢を放ったりもしている。

（これはスライム……でしょうか？）

一般的なスライムは魔術生命体としては低級にランクされる。単細胞生物と同じような物で、術者がインプットした単一の命令をこなすことしか出来ない。魔力量もたかが知れており、対応さえ間違えなければ手強い相手ではない。

そのはずなのだが。

（にしてはこの魔力量は明らかに異常ですね……）

スライムのような物から凄まじいまでの魔力が発散されているのが分かる。皮膚がピリピリするほどだ。

メイは確信した。これが奴らの『奥の手』だ、と。

（ようやく引きずり出せましたか……。さて、どうした物でしょうか？）

メイの前には二つの選択肢がある。

一つはこのまま逃げることだ。戦闘メイドの本務はレイーネのための時間稼ぎなのだから、引き離すように逃げるのが最良だろう。

もう一つは交戦すること。相手の能力が未知数な状態では危険な選択だが、首尾よく排除できればレイーネに向く脅威は激減する。

「ふっ……」

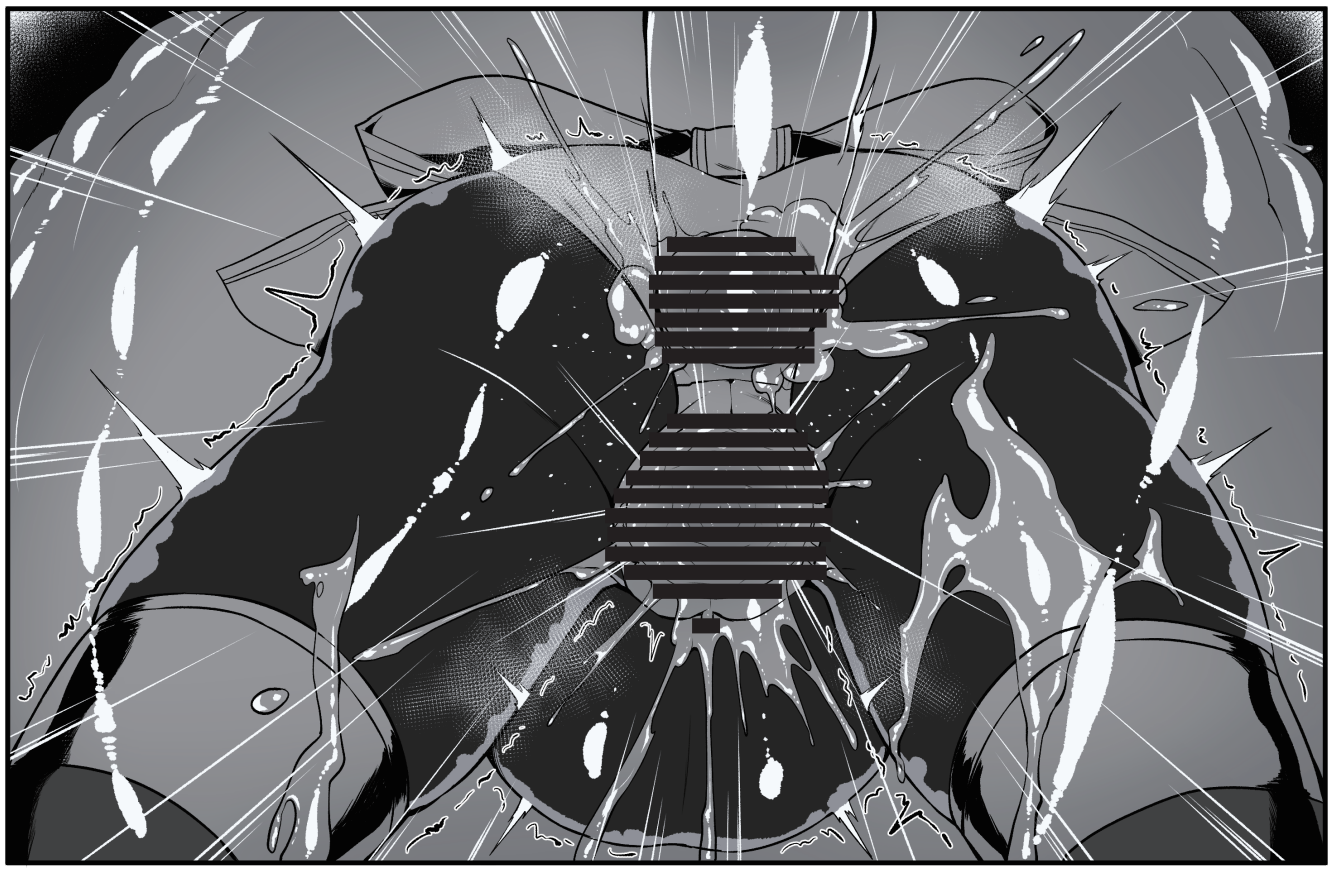
一瞬だけ思考を巡らせると、メイは小さく息を吐いた。

（よし、少々危険ですが干戈を交えましょう。倒せずともレイーネ様のために相手の手の内を知っておくのは悪くない）

そう決断すると黒髪の使用人は白銀のガントレットに包まれた手で大剣の柄を握り直す。

「やっと手応えのありそうな奴が出てきましたね。相手にならない機械（おもちゃ）ばかりで退屈していたところです」

メイドは大剣を振りかぶり、スライムとの戦いの火蓋を切った。



生まれたての仔牛のように震えさせることしか出来ない。

偉大な主人に仕え、戦うメイド騎士として恥じぬよう鍛えてきた肉体が、自分では絶対に鍛えられない内側から淫らに変容させられている。

（やぁぁぁぁぁぁっっ……！♥　や、やめろぉぉぉぉぉ……！♥　私の身体は、私の身体は、レイーネ様のっっっおぉぉ……♥　レイーネ様に捧げた、物おぉぉぉぉ……♥　勝手に、いじる、にゃぁぁぁぁっっ……！♥）

身体の変化に抗うかのように全身を暴れさせる。

しかしすでにメイの全身は半ば以上も媚毒スライムの中に取り込まれていた。形もなく文字通りつかみ所のない相手ではどうにも出来ない。

絶頂に震える指を必死に握りこぶしの形にして殴りかかってみても、快感のけいれんで跳ね返る足を驚異的な精神力で制御し、蹴り上げるように動かしてみても何の効果もない。

（くそぉっっ！　んぁぁぁぁあっっっ!!♥　くそぉぉっっ！　な、なんとか……抜け出して……！）

そう思うメイをあざ笑うかのようにスライムは動きを加速させていく。

口の中を満たしていた物は一旦体内へと引っ込んでいった。もちろん、すべて出ていったわけではない。

陰唇を穿つ粘流は激しさをましていった。充血した肉割れを濁流のように荒々しく擦りたてながら膣に入り込むと、肉襞をかき回すようにして敏感粘膜を抉り抜いていく。

不定形を最大限に活かして細かな間にまで入り込み、僅かな隙間もなく媚肉を刺激しまくった。

「んんあぁぉおおおおおおっっっっっ!!!♥はっっぁぁぁぁぁぉぉぉぉぉぉぉ、んぁぉぉぉぉぉっっっっっ!!!♥♥」

部分的に硬く変化する粘液は時には襞を掻きむしるようにイボトゲを作り、時には猫の舌のように小さな粒を無数に作ってGスポットをざりざりと舐めしゃぶってくる。

「おっごっっ!!!♥　んんっっおぉぉおっっっっ!!♥♥　」

子宮内部に充満する媚毒の塊はイソギンチャクのように細い触手を作り、内壁をにるにるとこそげてきた。普段なら快感どころか痛みしか感じないであろう行為だ。

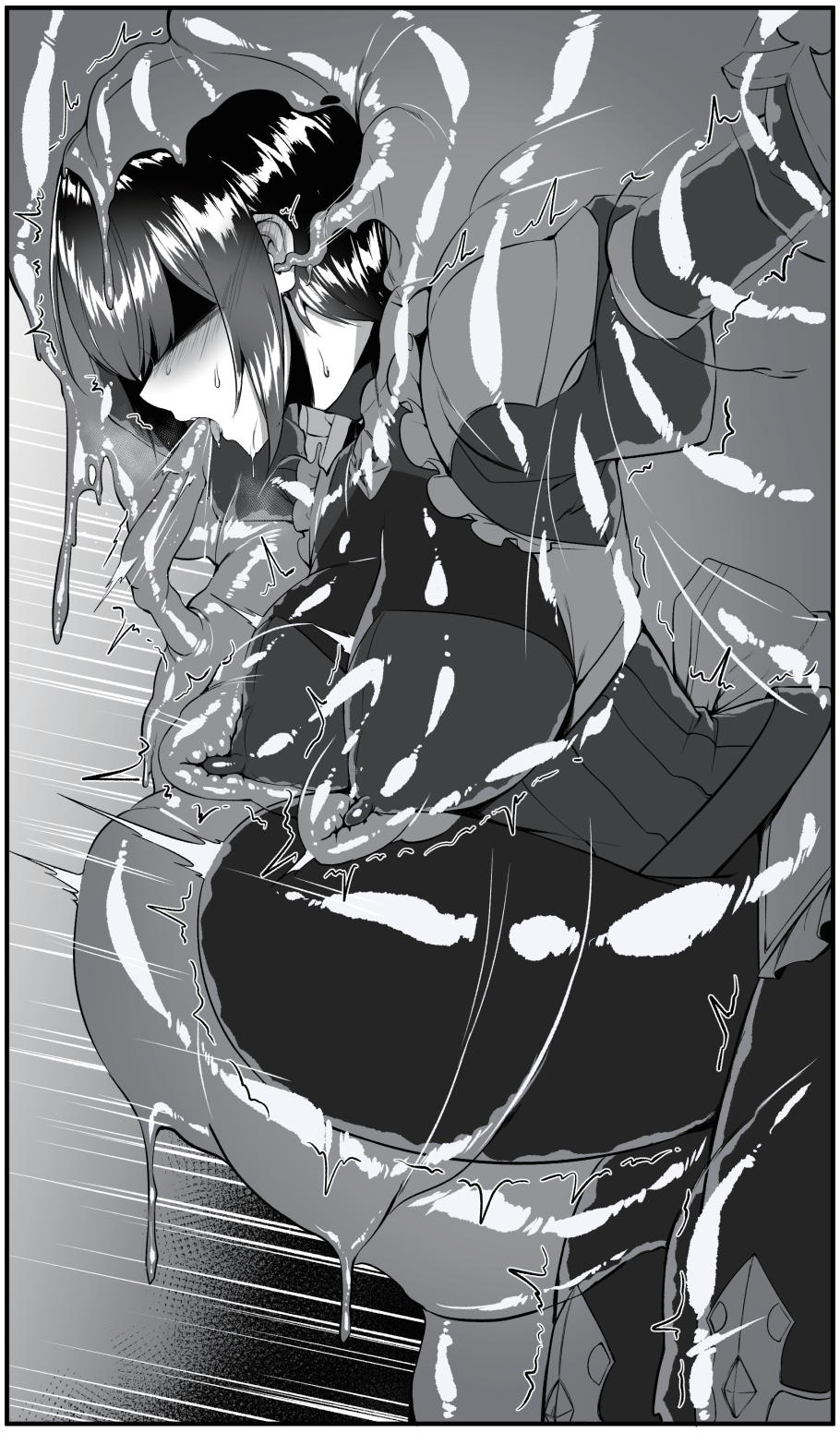
だが神聖な子作りの器官をも性器に変貌させられたメイにとっては目まいがするような凄まじい激悦だ。まさに腹部に快感の塊を詰め込まれ、破裂寸前の風船のよう。

（おなっっっっおながっっ、おながのながっっ舐め回されでっっ!!!♥）

人間では出来ない異形の責めに抵抗する術などあるはずもなかった。

その腹にもスライムがまとわりつき外側からも押し込み、揉み込むように責めをくわえてくる。腸をマッサージするように、子宮をわしづかみするように。

「おっっっっっっっっおっっっっっっっっ!!!!♥♥♥おっっ



ジなどない。そう思っていた。しかし女性としての性を弄ばれ、ただ悦楽の道具にされるのは屈辱だ。

（――だからこそ、レイーネ様になんとかお伝えしなくては……！　我が主に、この非道な生き物のことを伝えなくては……！）

そしてこの屈辱の万分の一でも女主人に味合わせるようなことはあってはならない。私のような目に遭わせることは絶対にできない。敬愛し、いや、人として愛しているレイーネのために。

（それだけは、命に替えても――！）

度重なる絶頂で脳細胞がすべて焼き切れそうな激感の中、メイはその一念だけで正気を保ち続けていた。

（どんな僅かな隙でもいい、機会を見つけて――！）

再び手に握りこぶしを作った瞬間、今度は真っ赤に染まった両耳にスライム忍び寄った。そして耳孔の中ににゅるにゅると潜り込んでいく。

「おぁっっ!?♥」

意表を突く箇所への襲撃に身を仰け反りかえらせる。まるで子供に耳かきをするかのように優しく耳の中をこじられると、脳の奥が蕩けるようなぞわぞわする奇妙な心地よさがメイを満たした。腰から送り込まれる激しい悦衝撃とはまた違ったスローな気持ちよさに、目が細まって

「あ……あぁぁぁぁぁぁ……♥」

と情けない喘ぎ声をこぼしてしまう。唇がわななき、震える舌が突き出されて甘く、荒い呼吸がこぼれ出す。

その口にさえも細目のスライムが入り込んでいっ

本作品への感想、ご意見などございましたら以下のアンケートフォームへお送りいただけますと幸いです。
アンケートお寄せいただいた方には表紙に使われております画像のオリジナル版をプレゼントいたします。

アンケートフォームへ飛ぶ（外部ページです）

制作・発行：Palette Enterprise
著者：文・高橋良喜　挿絵：deras
初版：2020年11月24日
連絡先：support@palette-e.com　もしくは　https://twitter.com/petakayan
本作品は18歳未満（高校生を含む）の閲覧を禁じます。
本作品に書かれている物はすべてフィクションです。現実に行った場合刑事罰に問われることがあります。
本作品の無許可での再配布（対価を伴わないサイトへの公開、交換なども含みます）、翻訳を禁じます。